

皆さんは、献血後の血液がどのような過程を経て、必要としている患者の元に届くか知っていますか。広島県の場合を、広島市中区の県赤十字血液センターに聞きました。

(まんてん)

血液センターでは毎日、医療機関からの要請と一日に使用する平均量3日分の「適正在庫」を基準に、翌日の献血計画を立てます。緊急の要請に応えつつ、過剰に提供を受けて献血者の厚意を無駄にしないためです。

広島市と福山市の県内2カ所の献血ルームや献血バスで集められた血液は一日5回、同センターに届けられます。検査課で、血液型やウイルスに侵されていないかをチェック。さらに詳しく調べるため、京都府福知山市にある血液管理センターへも、検体を送ります。昨年度は提供された血液のうち4.2%が残念ながら不合格となりました。

白血球は取り除く

一方、製剤課では成分献血で集められた血小板と血漿をそれぞれ密封。400ミリリットル献血の血液は特別なフィルターを通してろ過し、白血球を取り除きます。白血球は患者のものと輸血した血液のものがけんかをして、副作用を起こしてしまうため、特別な場合を除いて輸血には用いないのだそうです。その後、遠心分離



400ミリリットル献血で集まった血液を自動分離装置にかけ、赤血球と血漿に分離

献血後の血液の行方

使用目的ごとに分離

保存期間短い血小板不足

機で赤血球と血漿に分けられ、輸血用の血液製剤となります。

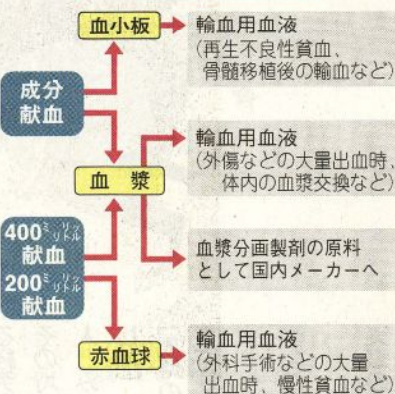
また血漿の一部は国内メーカーに送られ、特定のタンパク質を抽出して、やけどや血友病などの治療に使われる血漿分画製剤になります。

供給課は要請に従い、24時間体制で医療機関に血液を届けます。同センターは山口、島根、愛媛各県の血液センターと連携しており、その日の必要量に足りない場合は互いに協力し合います。「どうしても確保できない場合は、北海道や東京から空輸してもらおうケースも」と同センター渉外課の松浦圭二課長補佐(52)は話します。

主にかん治療など

血液の中から血小板と血漿だけを分離して採血する成分献血。広島市中区の献血ルーム「もみじ」

献血後の血液の行方



す。理由は県内に血液疾患の専門機関があるためだとみられます。2006年度は、約1割を他県からの協力に頼らざるを得ませんでした。

平日の確保に苦勞

現在、成分献血は献血ルームでしかできません。また40分から1時間と時間がかかるため、中には断念する人もいます。しかも、血漿の有効期間が採血後1年間なのに比べ、血小板は4日間と短く、平日の確保が難しくなっています。

1年のうち、11月から

では、訪れるドナーの約8割に成分献血をお願いしています。それでも、平日は血小板が目標に満たないことがあるそうです。

輸血が使われるのは、半数以上ががんや白血病の治療。実は事故や手術での使用は、そんなに多くありません。そのため必要な血液量は、毎日ほぼ一定です。

広島県の血小板製剤の使用量は、人口比でみると全国で最も多いそうで

4月は寒さで体調を崩したり、年末年始の忙しさなどが理由で献血が不足しがち。気温が急激に変わったり、雨が降りそうな日もドナーが少なく、同ルームの主事住岡田和美さん(35)は「毎週火、水、木曜日は特に苦労しています」と話します。

季節や曜日、天気を問わず、輸血を必要としている人がいます。平日なら待ち時間も少なくスムーズ。身近なボランティアに出掛けませんか。



献血ルームや献血バスから到着した血液を検査するスタッフ